バレエ実践の教育的研究の現状

原　みなみ（お茶の水女子大学大学院）

Current Trends in the Research of Ballet Practice

Minami HARA（Ochanomizu University, Graduate School）

Abstract

There is an abundance of literature regarding the practice of classical ballet. Studies on educational aspects of ballet, however, are not as common as those in the field of dance science. Based on literature seen in Japan and overseas, this paper aims to reveal the current trends in ballet practice research.

The literature shows that there has been a shift in views towards ballet practice since around 2000. The previous view of ballet practice was associated with the idea of "training" where a dancer's body and self are often separated. From 2000 onward, the research began to emphasize the importance of a dancer's mind-body connection and his/her own experience. It was considered that such a change was the result of influences from other practices as well as the ballet practitioners in the academia.

Key Words: classical ballet, ballet practice, ballet education, ballet training, dance education

はじめに

元はヨーロッパの宮廷舞踊であったクラシック・バレエ（以下、バレエ）は、今や世界中に広まり、多くの人々が様々な形で関わるものへと変化を遂げた。日本も例外ではなく、国内外で多くの日本人ダンサーが活躍しており、プロのダンサーを目指す以外にも、習い事としての人気も高い。バレエの実践、特に訓練に関する図書は日本国内のみでも多数刊行されており、バレエ実践への関心の高さが窺える。[注1)]

バレエは高度に形式化された舞踊で、その法則を身につけるまでには長期間の取り組みが必要とされる。筆者は自身の舞踊経験から、こうした長期間のバレエ実践は、動き方や仕草のみならず、ダンサーの人となりにも影響するのではないか、と考えるようになった。

舞踊教育分野においては、ドゥブラー（H'Doubler）が「舞踊は身体的な側面だけでなく、想像力、知性、審美眼、情動等の人格を育むのにもっとも適した芸術である」と述べているように、舞踊活動を通したダンサーの全人的な成長の可能性が指摘されている（H'Doubler, 1998: 64）。

その一方で、バレエ実践における教育的研究では、バレエ・ダンサーの育成を視野に入れてはいるものの、自然科学・医学分野の研究が圧倒的に多く、実践の観点からバレエ・ダンサーの全人的な成長を扱ったものは少ない。[注2)] そこで本研究では、舞踊教育とバレエ実践に関する、国内外の文献調査を通して、バレエ実践の教育的研究の現状を明らかにすることを目的とした。

本稿では、従来のバレエ実践と舞踊教育観をふまえた上で、文献調査で明らかになったバレエ実践の教育的研究の現状を検証していく。

語義規定

本論に入る前に、舞踊における「教育」、そして本研究における「バレエ・ダンサー」の定義について、確認したい。

●舞踊における「教育」

舞踊の実践において「教育 education」と「訓練 training」の語は混同されることが多々あるとコフ（Koff）は述べている（Koff, 2000）。コフによれば、「舞踊訓練 dance training」とは、「……舞踊スキルの熟達と将来のパフォーマンスを見据えた上で、動きや特定の運動制御能力（motor skills）習得のための方法を規定し、それを［ダンサーに］課すものである」（Koff, 2000: 27）。一方、「舞踊教育 dance education」は、「動きを通して自己表現と解釈を構築することで、自己認識（self-knowledge）を高めることを目指す」取り組みであるとされる（Koff, 2000: 27）。つまり、コフの定義によれば、舞踊「訓練」はスキルの習得を目的としたものであるのに対し、舞踊「教育」は、舞踊を通して自己理解を深め、育んでいくことを目的としている。また、先述のドゥブラーの緒言にもあるように、舞踊活動は、ダンサーの身体面だけでなく、知性や情緒等を育むとされる（H'Doubler, 1998）。こうしたことから、舞踊教育とは、舞踊活動を通してダンサーの全人的な成長を可能とするとともに、ダンサーの自己理解を育むものであるといえる。

以上のように、「舞踊訓練」と「舞踊教育」の定義は異なっている。しかし、舞踊全般においてこの二つが混同されているのであれば、バレエにおいても同様である可能性がある。本稿では、バレエにおける取り組み全般を「バレエ実践」とし、文献で "training" もしくは "education" と明記され、かつ、上記の定義の意味に沿っているものは、「訓練」あるいは「教育」とする。

●「バレエ・ダンサー」

先述のように現代におけるバレエ実践者は、プロ・ダンサーあるいはプロを目指す者に限られない。本調査で収集した文献では、プロのバレエ・ダンサーのみならず、大学で舞踊を専攻している学生やバレエ学校の生徒も「バレエ・ダンサー」として分類されていた。そこで、本研究においても、現代のバレエ実践を広く捉えるため、所属や立場に関わらず、バレエを継続的に実践する者を「バレエ・ダンサー」と称する。

1. 舞踊教育と従来のバレエ実践観：バレエ実践はどのように捉えられてきたのか

20世紀前半に確立された舞踊教育においては、ヨーロッパではルドルフ・ラバン（Rudolf Laban）が、アメリカではマーガレット・ドゥブラーが草分け的存在とされている。高度に形式化されたバレエへの批判として誕生したモダンダンスが、アメリカでは舞踊教育で取り扱われる舞踊の原型となっており、舞踊教育における舞踊は創造的表現活動として捉えられるようになった（櫛田, 2007）。一方、リトミックから強い影響を受けたラバンは、人間の動きに興味を持ち、運動の緻密な分析を行った。アメリカでは舞踊の芸術的要素が重視され、イギリスでは運動教育（体育）的要素に重きが置かれた舞踊教育観と実践が形成されていった（櫛田, 2007）。それぞれの発展やアプローチに差異は見られるが、舞踊教育の理念は、ダンサーが舞踊という活動に身体のみならず、感情、知性、精神の諸領域を投じることで、全人的な経験を積み重ね、全人格の発達を目指すものとなった（H'Doubler 1998; Smith-Autard 2002）。

一方、バレエの実践、特に訓練については、「……即興、実験、あるいは疑問を抱く余地がない」ほど厳格に体系化されたもの、と考えられてきた（Kirstein, 1975: 10）。そもそもバレエの訓練法は、「……ダンサーの身体をバレエのメディアという特殊な身体へと仕立てる」ために存在すると考えられている（譲原,

2007: 30)。そうした特殊な身体に近づけるためには、ステップのドリル的な反復練習を行い、「ダンサーの非人間化、つまり日常における身体の習慣を矯正させる必要がある」といった見解もある（Levinson, 1974: 117; Choi ほか , 2014)。舞踊における身体論を研究するフォスター（Foster）は、バレエ実践におけるダンサーのあり方について、「巧みな習得能力によって、自らの身体に訓練を課し、理想の動きを目指し、振付家に、そして究極的には、伝統に忠実な存在である」と述べている（Foster, 1997: 243)。

舞踊教育の研究者スミス＝オタード（Smith-Autard）によって提唱された舞踊の教育モデルによれば、バレエ学校での訓練と学校教育で行われるような舞踊実践は、それぞれプロフェッショナル型（professional model）と教育型（educational model）に分類することができる（Smith-Autard, 2002)。プロフェッショナル型は、プロセスよりもプロダクト（あるいはパフォーマンス)、洗練されたテクニック、レパートリーの習得が重視されており、あらかじめ定められた教授法の中で行われていくタイプの舞踊実践である。これは、高等学校や高等教育機関等、ある程度の専門性が求められる環境で採用されるモデルであり、その道のエキスパートである師に従う形式の指導が主である。一方の教育型では、生徒たちの積極的な問題解決を促すような指導法が採られることが多く、舞踊の創作活動が頻繁に行われる。そのため、舞踊活動における、生徒の創造性、個性、主体性が優先されることから、プロダクトよりもプロセスが重視される。

先ほど挙げられたような、バレエの理想を実現するために行われる訓練のあり方は、プロダクト（あるいはパフォーマンス)、洗練されたテクニックを重視するプロフェッショナル型に相当するといえる。そもそもの舞踊実践の目的が異なること、プロフェッショナル型と教育型それぞれの特徴からも明らかなように、訓練としてのバレエ実践と舞踊教育としての実践の理念は、相容れないものがあるといえる。また、バレエではない舞踊のアプローチで舞踊の教育的側面が追求されたことも、バレエ実践と舞踊教育の異なる実践観につながったと考えられる。

2. 文献調査結果：バレエ実践の教育的研究の現状

それでは、現在の舞踊教育研究、およびバレエ実践の教育的研究においては、バレエ実践はどのように捉えられているのだろうか。本項では、文献調査から明らかになったバレエ実践の教育的研究の動向を検証していく。

2-1. 対象文献・調査方法

本研究にて扱う文献は、国内のバレエ教育研究に加え、これまで調査されてこなかった海外のバレエ教育研究の学術論文を対象としている。海外の文献は、言語が英語のものを対象とした。[注3)]

文献検索は、“ballet training”（バレエ 訓練)、“ballet education”（バレエ 教育)、“ballet practice”（バレエ実践）をキーワードとした。[注4)] 海外の文献はアメリカ舞踊教育学会（National Dance Education Organization）が編纂する Dance Education Literature and Research descriptive index（DELRdi）を用いて行なった。[注5)] また、日本の先行研究も、同様のキーワードを用いて、CiNii で検索した。

本研究は、バレエ実践を通した教育に着目したものである。そのため対象とする文献は、研究対象をバレエ実践とバレエ・ダンサーであることが明らかなものに限定した。バレエの指導を扱う文献においても、テクニックの上達のみならず、ダンサーの人間的成長を考慮した理念等を明記したものを対象とした。すでに多くの研究が行われている、自然科学・医学分野の研究、およびそれに付随するトレーニング法に関する研究は、除外した。

本研究の対象は舞踊教育・バレエ教育に関する学術分野の研究に限定したため、バレエの指導本、教則本、カリキュラム等の調査、考察は除外することとした。

2-2. 文献の検索結果・分類

文献の検索件数は、DELRdi が160件、CiNii が77件であった。その中から、バレエ実践とバレエ・ダンサーを対象とした文献を抽出した結果、DELRdi では119件、CiNii では23件が該当した（表1参照）。分類の詳細は表2を参照されたい。[注6)]

表1．キーワード別の検索結果と対象該当件数（単位：件）

	DELRdi		CiNii	
	検索結果	対象該当	検索結果	対象該当
Ballet Training（バレエ 訓練）	74	57	3	2
Ballet Education（バレエ 教育）	69	47	66	18
Ballet Practice（バレエ 実践）	17	15	8	3
合　計	160	119	77	23

表2．キーワード別の検索結果の分類（単位：件）

	自然科学・医学系	教育実践関係	その他	合計
Ballet Training	36	9	12	57
Ballet Education	21	13	13	47
Ballet Practice	6	5	4	15
計	63	27	29	119
バレエ　訓練	1	0	1	2
バレエ　教育	2	2	14	18
バレエ　実践	0	1	2	3
計	3	3	17	23
合　計	66	30	46	142

表2の「教育実践関係」に分類されている30件文献の中から、「バレエ実践を通した教育」のテーマに該当するものを選出した結果、17件（DELRdi: 14件、CiNii: 3件）の文献が該当した。これらの文献の多くは、2000年以降に発表されたこと、また著者が、ダンサー及び指導者等バレエ実践の経験者であることが特色として挙げられる。そうした著者の背景もあり、自らの舞踊体験や実践を反映した考察も多くみられた。

本研究では、これらの検索した文献とそれぞれの引用文献を参照し、文献調査を実施した。なお、本研究で使用したバレエ実践の教育的研究に関する文献の国別件数は、表3の通りである。

表3．文献の国別件数と著者名（単位：件）

国	件数	著者名（アルファベット順）
アメリカ	7	Alterowitz（2014），Gray and Kunkel（2001），Green（2002-2003），Johnson（2011），Lakes（2005），M.L. Morris（2015），Spohn and Prettyman（2012）
イギリス	5	Dixon（2005），Jackson（2005），G. Morris（2003），Pickard（2012），Pickard（2013）
日　本	4	市瀬（2008），伊藤（2011），倉田（2015），小山（2013）
オーストラリア	1	Johnston（2006）
韓　国	1	Choi and Kim（2014）
オランダ	1	Aalten（2007）
フィンランド	1	Salosaari（2000）
カ ナ ダ	1	Ritenburg（2010）

3．これまでのバレエ実践における指導のあり方

近年、バレエ界では、古典作品だけでなくコンテンポラリー・ダンスを含む様々な作品を踊りこなすことのできる、多様性に富んだ、技術力の高いダンサーが求められている（Morris, 2003; Jackson, 2005）。加えて、ダンス・サイエンスの発展に伴い、解剖学や動作学に基づいた指導やトレーニングによるダンサーのパフォーマンス向上が注目されている（Salosaari, 2001）。

日本国内においても、専門的な知識に基づいたダンサーの育成やそれを支えるシステムの構築を目指す研究が行われており、そのなかでも、指導者の育成が欧米に比べて遅れていること、また日本におけるバレエ指導者の資格制度の検討が注目されていることが明らかになった（伊藤，2011; 小山，2013; 倉田，2015）。

一方、パリ・オペラ座の元エトワールのジャン＝ギョーム・バール（Jean-Guillaum Bart）は、ダンサーの表現力よりも高度な身体能力や身体のラインが過度に注目される近年のバレエ界の傾向を危惧している。[注7)] また、こうした風潮に伴い、バレエの技術的なエクササイズをバレエの本質である、と教師やダンサーが捉えている可能性があることをG. モリス（G. Morris）は指摘している（Morris, 2003）。そのため、本来は振付家や作品のスタイルや意図、そしてその解釈などを学び、ダンサー自身の表現を磨く場としてのヴァリエーション・クラスにおいても、技術的側面に指導が集中すると述べている（Morris, 2003）。

海外の文献では、このようなバレエ・ダンサーの身体性や技術といったバレエの視覚的要素が強調されるバレエの「理想」、また、その指導をめぐる問題の指摘が多くみられた。

先述のように、バレエ・ダンサーは、訓練を経て、バレエのステップを習得し、バレエ・ダンサーとしての身体を形成していく過程を辿っていく。

しかし、M. L. モリス（M. L. Morris）は、300年も昔に提示されたバレエの動きやポジションの「理想」が、今なお、ダンサー自身の踊る感覚や体験を凌駕する影響力を持ち続け、バレエ実践のあり方を狭めているのではないかと指摘している（Morris, 2015）。

アールテン（Aalten）によれば、バレエ・ダンサーは、求められた理想を追求するために、積極的に自分自身の身体の不調や要求を無視する傾向がある（Aalten, 2007）。このようなダンサー自身の感覚や体験を抑制する心身二元的な実践のあり方は、怪我の慢性化や摂食障害といったダンサーの心身の問題をまねくと指摘されている（Green, 2002-2003; Ritenburg, 2010; Alterowitz, 2014; Morris, 2015）。

ピカード（Pickard）のインタビュー調査では、バレエ・ダンサーとしての身体の形成とふるまい方がバレエ・ダンサーとしてのアイデンティティの確立に関連していると考察されている（Pickard, 2012; Pickard 2013）。そのため、上記のようなバレエ・ダンサーの取り組みが、ダンサーのアイデンティティの形成や捉え方にまで影響を及ぼす可能性が示唆されている（Pickard, 2012; Pickard 2013）。

こうした状況は、バレエ実践における指導のあり方とも無関係ではない。

バレエの技術習得において行われる「デモンストレーションとコピー」を通した指導は、指導者が中心となる学習環境を作り出すと指摘されている（Salosaari, 2001; Alterowitz, 2014; Choi ほか , 2014: 15）。指導者は、指示を出し、フィードバックを与える立場であり、さらにはバレエ・ダンサーのキャリアの形成にも影響を与えることから、彼らに権威が集中する（Foster, 1997; Gray ほか , 2001; Morris, 2003; Aalten, 2007）。そのため、たとえ理不尽な指導を受けようと、ダンサーは、指導者や指導そのものに疑問を感じたり、質問や発言したりしてはならず、指導者の求めるものを体現するという暗黙の了解がバレエ界には存在すると指摘されている（Foster, 1997; Morris, 2003; Lakes, 2005）。

バレエという舞踊の特色、そして実践・指導における慣習や文化が、バレエ・ダンサーの自己と身体が切り離されるような環境を作り出しているにも関わらず、こうした指導環境は改善されず、ダンサーはその環境に耐えなければならないとされてきた（Lakes, 2005; Morris, 2015）。

とはいえ、バレエ実践ではダンサーの心身の健やかな成長が軽視され、技術習得や身体訓練ばかりに目が向けられているかといえば、そうではない。ロイヤル・バレエの元プリンシパル・ダンサーのシーモア(Seymour)は、自身のバレエ実践を振り返り、技術の反復練習だけでなく、仲間同士で動きや表現方法を分析しあったり、パートナーとのやりとりを学んだりしたことが、彼女の分析力、倫理観、想像力を養ったと述べている（Seymour, 2000)。こうした経験から、バレエ実践の身体的な「訓練」のみならず、ダンサーの内面性や知性を育む「教育」的側面に注目すべきであるとシーモアは指摘する（Seymour, 2000)。

本調査の文献からは、シーモアが述べているような、バレエ実践の本来あるべき姿や新たな指導法の検討が、2000年頃から多数見受けられるようになったことが明らかになった。

次に、2000年以降に発表されたバレエ実践の教育的研究を概観する。

4．三人称的視点から一人称的視点へ

本調査で収集した文献で目立ったのは、「バレエはこうあるべきである」といった理想やダンサーを鋳型にはめ込むような三人称的視点ではなく、ダンサーの感覚や体験等の「一人称的視点」を取り入れた実践の提唱であった（Green, 2002-2003; Dixon, 2005; Jackson, 2005; Paskevska, 2005; Johnston, 2006; Johnson, 2011; Choi ほか, 2014; Spohn ほか, 2014)。[注8] これらの文献には、バレエ以外の実践の視点を取り入れるようなアプローチが多く見られた。なかでも、ソマティクス（somatics）の実践や思想が舞踊実践に浸透したことによるものが大きいといえる。

ソマティクスは、実践者の心身一元的状態を重視し、身体の動きを自らの内部から探求するプロセスに基づいた取り組みを指す（Batson ほか, 2009)。[注9] 舞踊実践においては、1980年にマイヤーズ（Myers）による「ボディ・セラピーと現代のダンサー（“Dance Therapies and the Modern Dancer)」が米国『ダンス・マガジン』に連載されたことから、ソマティクスの認知が広まり、様々なアプローチが舞踊実践に取り入れられるようになったとされる（Myers, 1980a; 1980b; 1980c; 1980d; 1980e; 1980f; Batson ほか, 2009)。[注10] 本調査においては、グリーン（Green)、ディクソン（Dixon)、ジャクソン（Jackson）らのアプローチにソマティクスの実践に関する言及が確認できた（Green, 2002-2003; Dixon, 2005; Jackson, 2005)。

ディクソンは、ソマティクス実践のひとつであるトップフ・テクニック（Topf Technique）に基づいたバレエ指導の検討を行っている（Dixon, 2005)。幼い子供のクラスであっても、例えば「胴体の足（座骨）でしっかりと立つ」と指導をすることで、正しいバレエの姿勢の基礎を作ることができるといった実践例を紹介している（Dixon, 2005: 87)。ダンサーが具体的な身体感覚を経験していくこと、またそれに基づく即興ダンス（例：ヘビの動きの即興で上体の動きを模索する）によって、動きとダンサーの身体感覚や想像力を総合的に養うことを目指している（Dixon, 2005)。

またバレエ実践をはじめとする「訓練」としての舞踊と並行して、ソマティックスのセッションを行うことで、ダンサーの身体の捉え方、動きへの取り組み方を再考する機会を与える実践も行われている（Green, 2002-2003)。

ソマティクスの実践そのものでなくとも、ダンサーが積極的に自分自身の身体と向き合うアプローチは他にも提唱されている。パスケヴスカ（Paskevska）は、モダンダンスのリモン・テクニック（Limon Technique）のコンセプトを用いて、同様のアプローチを考案している（Paskevska, 2005)。ダンサーの身体感覚への注目を促すようなリモン・テクニックのコンセプトに基づいて、バレエの動きやポジションを分析し、ダンサーが自らの身体感覚に敏感になるようなフィードバックやアプローチを提案している（Paskevska, 2005)。

スポーン（Spohn）とプリティマン（Prettyman）も、ソマティクスを取り入れたバレエ実践を認識しつつ、比喩表現によって同様の効果を目指す指導を考案している（Spohn ほか, 2012)。彼女らは、「踊ること

はキスをするような感じ（“Moving is like making out”）」という比喩表現から、動くその時々の身体感覚のみならず、ダンサーがそれまで経験した感情や体験をバレエという舞踊体験と関連づける教育的実践を試みている（Spohn ほか , 2012）。

これらの文献から、ソマティクスをはじめとする様々な分野の理論と実践に基づいた、バレエ実践の新たなアプローチが提案されていることが明らかとなった。先行研究では、バレエ・ダンサーが自らの存在や身体のあり方を切り離すことで、バレエの「理想」に近づこうとする傾向が問題視されてきた。それに対し、これらの文献で提唱されている新たなアプローチでは、バレエ・ダンサーが自らの身体、そして体験や自分自身と向き合う「一人称的視点」が重視されていることが明らかになった。

5．一方通行な指導から多様な関わり合いへ

世界中どこのバレエ・スタジオに行っても、指導者がコンビネーションや習得すべきステップを提示し、生徒たちがそれを定められた音楽やカウントの中で繰り返し行うレッスン形式が採られている（Salosaari, 2001）。しかし、バレエ実践をダンサーにとってより豊かな体験とするために、上記のような一方通行ではないバレエ指導のあり方が検討されている（Salosaari, 2001; Johnston, 2006; Johnson, 2011; Alterowitz, 2014; Choi ほか , 2014）。

サロサーリ（Salosaari）は、モストン（Mosston）とアシュウォース（Ashworth）により考案された体育における指導スタイル論に基づいたバレエ指導のアプローチを考案した（Salosaari, 2001）。サロサーリは、生徒の主体性が希薄になりがちな、単なるステップの反復や習得ではなく、ダンサーが既存の定められた形式からでも様々な意味や表現を考え、体現できるようなバレエ実践を目指した。これを実現するために、普段バレエのレッスンでは見られないような問題解決的発見の指導スタイル（divergent production style）を採用し、連続ワークショップを行った。[注11] これは、モデレーターである教師が学習環境や課題を設定するものの、生徒たちが課題を行い、その上でディスカッションをし、そこから課題に対する様々な答えを見い出すものである（Mosston ほか, 2008）。サロサーリのこうしたアプローチは、ダンサー自身とバレエの動き、そしてバレエという世界を積極的につなげることで、ダンサーのエンパワメントを目指すバレエ実践における舞踊教育のあり方を示したといえる（Salosaari, 2001）。

元バレエ・ダンサーであり、教師としての経験を持つジョンソン（Johnson）も同様に、従来のバレエ訓練では強調されてこなかった、バレエに対するダンサー自身の所有権（self-authorship）の重要性について言及している（Johnson, 2011）。彼は大学の指導現場において、全てを教師が提供するのではなく、学生たちに問いかけ、彼ら自身で探索させたり、ときには選択の余地を与えることで、学生の体験とバレエ実践を関連づけている。

ダンサーの体験をバレエの技術習得のみに限定しないバレエ実践については、市瀬とアルトロウィッツ（Alterowitz）も言及している（市瀬, 2008; Alterowitz, 2014）。市瀬は、バレエ・舞踊史を実践と連携させてバレエ教育の中に取り入れることで、ダンサーが歴史的・時系列的な感覚を有すること、またそれに基づいて現状を理解、考察する力を養うことができると述べている（市瀬, 2008）。アルテロウィッツは、バレエ実践の場は、西洋社会におけるジェンダーや美の概念について思索するのに最適であるとし、ダンサーが身体を動かしつつ、考え、議論することで、体験と思考が融合される心身一元的な学びの場としての可能性を指摘している（Alterowitz, 2014）。

また、バレエ実践を通した分析力や思考力の発展には、ダンサーの言語を介した内省が重要であるとジョンストン（Johnston）は指摘する（Johnston, 2006）。レッスンを内省する日誌をつけたり、学んだことのマインドマップを作成したり、より活発に生徒たちの体験や思考を言語によって体系立て、整理する機会を取

り入れることで、ダンサーの分析力や思考力、論理的なコミュニケーション能力、またバレエそのものに対する理解を育むことが可能になると述べている（Johnston, 2006）。

従来の一方通行の指導から脱しようとするこれらのアプローチは、バレエ実践を、従順なダンサーを仕立てる場ではなく、ダンサー自らがバレエ実践を通して批判的に物事を捉え、思索する場として捉えていることが明らかになった。そのため、指導者・ダンサー間、ダンサー同士、自分自身との対話、また、自分と社会といった多様な関わり合いを可能とするバレエ実践の提唱が多くみられた。

まとめ

本研究では、国内外の学術論文を対象に、バレエ実践の教育的研究の動向を調査した。対象とした文献では、プロのダンサーに限らず、継続的なバレエ実践者をバレエ・ダンサーとして捉えており、本研究のバレエ・ダンサーの定義もこれに倣った。

先行研究から、バレエの「理想」を体現する身体を作るための「訓練」、そして伝統や振付家に従事することで、ダンサーの体験や主体性が軽視されるような実践がバレエには存在すること、またそうした状況を問題視する傾向が明らかになった（Foster, 1997; Green, 2002-2003; Jackson, 2005; Lakes, 2005; Alterowitz, 2014）。こうしたバレエの実践観は、全人的教育を目指す舞踊教育の思想とは相入れないものであった。一方、2000年以降の研究からは、ただ技術を身につけるだけでなく、バレエ・ダンサー自らの舞踊体験を通して、自らの身体を捉え、思考をめぐらせ、時に対話をし、そこで得た経験、知識、考えを実践に還元するというプロセスを重視する傾向が目立つようになってきた。つまり、バレエ・ダンサーの身体的側面のみならず、思考力、感受性やダンサーの自己認識を育むことを視野に入れた全人的な「舞踊教育」の思想が、バレエ実践においてみられるようになってきたといえる。その背景には、他分野の舞踊や実践とのクロスオーバーが存在することが先行研究から明らかになった。

このような視点の変化の要因のひとつに、バレエ・ダンサー、あるいは指導者としての経験を持つ者がバレエ教育研究、あるいは舞踊教育研究に携わるようになったことが挙げられる。本調査で扱ったバレエ実践に関する文献においては、21件中16件の著者がバレエ実践の経験者であり、これらの多くが2000年以降に刊行されている。[注12)] こうしたことから、近年のバレエ教育研究では、実践者の経験に基づいた研究がなされていること、また実践者のバレエ実践の現状に対する見解に、ダンサーの全人的な舞踊体験を重視するという共通点があることが明らかになった。

新たなバレエ実践に対するアプローチが検討される一方で、それらの施行や普及には、指導内容と時間の兼ね合い、指導者の知識や経験の水準、ダンサーの新たなアプローチに対する戸惑いや既存の強固な体制等、未だ多くの課題が残されている（Salosaari, 2001; Johnston, 2006; Spohn ほか, 2012; Choi ほか, 2014; Alterowitz, 2014）。

しかし、これまで注目されることが少なかったバレエ実践の教育的意義を追求していくことは、バレエの教育実践と研究への貢献だけでなく、舞踊教育分野の実践と研究の発展にもつながる。本研究で浮かび上がったバレエ「訓練」からバレエ「教育」へという視点の転換は、現代のバレエ実践のあり方の多様性とともに、課題解決に向けた、今後のバレエ実践に、さらなる変化をもたらしていくことになるであろう。

今後の課題

本調査は、バレエ実践の教育的側面に関する研究動向を探ることを目的としたため、学術研究を対象として行った。しかし、バレエ実践における教育的側面について考察を進めていくには、本調査では対象としな

かったバレエ指導書やカリキュラム、またダンサーや指導者の伝記的・歴史的研究調査が不可欠である。今後は、これらをふまえた研究を行うことで、バレエ実践における舞踊教育の可能性に関する考察を深めていきたい。

注

注1）国会図書館の蔵書で「バレエ」と「レッスン」のキーワード検索（図書のみ）を行ったところ、52件が該当した。そのうち子ども向けの絵本や物語等、バレエ実践に直接的に関わらない文献を除くと、35件が教則本やバレエ・テクニック向上を目的としたものであった。

注2）昭和音楽大学の『「バレエ教育現場との連携による日本におけるバレエ教育システムに関する研究」報告書』の中で水村は、新体操やフィギュア・スケートなどの他の芸術系運動と比較しても、バレエに関する自然科学分野の研究が盛んに行われていることを指摘している（小山, 2013）。本調査においても、検索した論文の分類からこれと同様な結果が見られた。

注3）鉤括弧付きの英語の文献の引用は、筆者による翻訳である。

注4）より多くの文献を検索できるよう、キーワードは語句を区切って調査を行なった。例: "ballet training" ではなく、"ballet" と "training" の両方を含むもの。日本語においても「バレエ訓練」ではなく「バレエ」「訓練」の両方を含むものとした。

注5）DELRdi は英語圏の舞踊教育分野専門の文献インデックス集であり、学術誌はもちろん、学位論文や学会プロシーディング等を検索することができるシステムである。

注6）異なるキーワードでも同一の論文が該当することもあったが、本調査では延べ数で論文数を数えた。表1、表2の件数は、延べ数である。

注7）これは、2012年5月18日に青山学院大学にて開催された、ジャン＝ギヨーム・バール講演会「ダンス・クラシックの今：伝統と革新のはざま、逆説に満ちた世界」での講演内容に基づいたものである。

注8）「三人称的視点」と「一人称的視点」は、ジャクソンが論文「My dance and the ideal body: looking at ballet practice from the inside out」の中で繰り返し用いた用語である（Jackson, 2005）。他の研究者からも同様に、外的要因ではなく、ダンサーの心身一元的状態や体験を重視すべきである、という指摘がなされているが、ここではジャクソンの用語を使った。

注9）1970年代にトマス・ハンナによって名づけられた分野であるが、その実践にはアレキサンダー・テクニック（Alexander Technique）、フェルデンクライス・メソッド（Feldenkrais Method）、バーテニエフ・ファンダメンタル（Bartenieff Fundamentals）やヨガ等、様々なものが挙げられる（Batson ほか, 2009; Paskevska, 2005）。

注10）原文連載名は、"Dance Therapies and the Modern Dancer" であるが、この連載ではモダンダンスだけでなく、当時の舞踊実践やダンサーについて広く触れていること、またバレエ実践についても言及していることから、「モダンダンスのダンサー」ではなく、「現代のダンサー」という意味での "the modern dancer" であると解釈した。この連載でマイヤーズは、自身の舞踊経験とボディ・セラピーの体験をもとに、ソマティクスの実践がどのように舞踊実践に生かされるかについて述べている。初回の導入と最終回のまとめ以外は、バーテニエフ・ファンダメンタル、アレキサンダー・テクニック、フェルデンクライス・メソッド、イデオキネシス（Ideokinesis）についてそれぞれ取り上げている。（Myers, 1980a; 1980b; 1980c; 1980d; 1980e; 1980f; Batson ほか, 2009）。

注11）モストンの指導スタイルの日本語の用語は、鈴木の「『教授スタイルの連続体モデル（Mosston, M.）』の分析」に基づいたものである。

注12）DELRdi と CiNii で検索し、該当した17件に加え、それらの引用文献から参照したバレエ実践の教育的研究を合わせた件数。著者の経歴については、経歴欄や文中に記載されているものを参照した。なお、同一著者による文献が複数ある場合でも1件として数えた。

文献

1) Alterowitz, G., 2014, "Toward a Feminist Ballet Pedagogy: Teaching Strategies for Ballet Technique Classes in the Twenty-First Century", *Journal of Dance Education*, 14(1): 8-17.

2) Aalten, A., 2007, "Listening to the Dancer's Body", *Sociological Review*, 55(1): 109-125.

3) Batson, G. and International Association for Dance Medicine and Science, 2009, "Somatic Studies and Dance", http://c.ymcdn.com/sites/www.iadms.org/resource/resmgr/resource_papers/somatic_studies.pdf.（2016年9月15日）

4) Choi, E., and N. Kim, 2014, "Whole Ballet Education: Exploring Direct and Indirect Teaching Methods", *Research in Dance Education*, 16 (2): 142-160.

5) Dixon, E., 2005, "The Mind/Body Connection and the Practice of Classical Ballet", *Research in Dance Education*, 6 (1/2): 75-96.

6) Foster, S. L., 1997, "Dancing Bodies", In *Meaning in Motion: New Cultural Studies of Dance*, edited by Jane Desmond, 235-257. Duke University Press: Durham, NC.

7) Gray, K. M. and M. A. Kunkel, 2001, "The Experience of Female Ballet Dancers: A Grounded Theory", *High Ability Studies*, 12(1): 7-25.

8) Green, J, 2002-2003, "Foucault and the Training of Docile Bodies in Dance Education", *Arts and Learning Research*, 19(1): 80-100.

9) H'Doubler, M., 1998, *Dance a Creative Art Experience*, University of Wisconsin Press: Madison, WI.

10) 市瀬陽子，2008,「バレエ教育における舞踊史の意義」,『聖徳大学研究紀要．児童学部 人文学部 音楽学部』19: 57-63.

11) 伊藤藍衣，2011,「卒業研究　バレエ教育における科学的指導とは何か―日本バレエ界の現状をもとに」,『日本女子大学　文化学研究』16: 85-99.

12) Jackson, J., 2005, "My Dance and the Ideal Body: Looking at Ballet Practice from the Inside Out", *Research in Dance Education*, 6 (1-2): 25-40.

13) Johnson, L., 2011, "More Than Skin Deep: The Enduring Practice of Ballet in Universities", *Theatre, Dance and Performance Training*, 2(2): 181–197.

14) Johnston, D., 2006, "Private Speech in Ballet", *Research in Dance Education*, 7(1): 3-14.

15) Kirstein, L., 1975, *The Classic Ballet: Basic Technique and Terminology*, Alfred A. Knopf: New York.

16) Koff, S. R., 2000, "Toward a Definition of Dance Education", *Childhood Education*, 77(1): 27-31.

17) 櫛田芳美，2007,「身体表現としての舞踊教育―アメリカ、イギリス、日本を中心に―」,『総合人間科学』7: 21-30.

18) 倉田梓，2015,「日本のバレエ教育における指導者資格に関する一考察」,『関東学園大学紀要』23: 16-33.

19) Lakes, R., 2005, "The Messages behind the Methods: The Authoritarian Pedagogical Legacy in Western Concert Dance Technique Training and Rehearsals", *Arts Education Policy Review*, 106 (5): 3-18.

20) Levinson, A., 1974, "The Spirit of the Classic Dance", In *Dance as a Theatre Art: Source Readings in Dance History from 1581 to the Present*, edited by Selma J. Cohen, 113-117, Princeton Book Company: New Jersey.

21) Morris, G., 2003, "Problems with Ballet: Steps, Style and Training", *Research in Dance Education*, 4 (1): 17-30.

22) Morris, M. L., 2015, "Re-thinking Ballet Pedagogy: Approaching a Historiography of Fifth Position", *Research in Dance Education*, 16 (3): 245-258.

23) Mosston, M. and S. Ashworth, 2008, *Teaching Physical Education* (first online edition), Pearson Education: USA.

24) Myers, M., 1980a, "Body Therapies and the Modern Dancer: The New 'Science' in Dance Training", *Dance Magazine*, February: 90-92.

25) Myers, M., 1980b, "Body Therapies and the Modern Dancer: Irmgard Bartenieff's Fundamentals", *Dance Magazine*, March: 88-92.

26) Myers, M., 1980c, "Body Therapies and the Modern Dancer: The Alexander Technique", *Dance Magazine*, April: 90-94.

27) Myers, M., 1980d, "Body Therapies and the Modern Dancer: Moshé Feldenkrais's Awarness Through Movements", *Dance Magazine*, May: 130-146.

28) Myers, M., 1980e, "Body Therapies and the Modern Dancer: Todd, Sweigard, and Ideokinesis", *Dance Magazine*, June: 90-94.

29) Myers, M., 1980f, "Body Therapies and the Modern Dancer: Dance Training's Frontier", *Dance Magazine*, July: 78-82.

30) 小山久美編, 2013,『「バレエ教育現場との連携による日本におけるバレエ教育システムに関する研究」報告書』, 東成学園昭和音楽大学バレエ研究所：神奈川.

31) Paskevska, A., 2005, *Ballet Beyond Tradition*, Routledge: New York.

32) Pickard, A., 2012, "Schooling the Dancer: The Evolution of an Identity as a Ballet Dancer", *Research in Dance Education*, 13(1): 25-46.

33) Pickard, A. 2013, "Ballet Body Belief: Perceptions of an Ideal Ballet Body from Young Ballet Dancer", *Research in Dance Education* 14(1): 3-19.

34) Ritenburg, H. M., 2010, "Frozen Landscapes: A Foucauldian Genealogy of the Ideal Ballet Dancer's Body", *Research in Dance Education*, 11(1): 71-85.

35) Salosaari, P., 2001, *Multiple Embodiment in Classical Ballet Educating the Dancer as an Agent of Change in the Cultural Evolution of Ballet*, Theatre Academy: Helsinki.

36) Seymour, L., 2000, "Ballet Education: Are We Forgetting Fundamentals?", *The Dancing Times*, January, 313.

37) Smith-Autard, J., 2002, *The Art of Dance in Education*, Bloomsbury: London.

38) Spohn, C., and S. S. Prettyman, 2012, "Moving is Like Making Out: Developing Female University Dancer's Ballet Technique and Expression Through the Use of Metaphor", *Research in Dance Education*, 13(1): 47-65.

39) 鈴木理, 1994,「『教授スタイルの連続体モデル（Mosston, M.)』の分析」,『スポーツ教育学研究』14(1):17-27.

40) 譲原晶子, 2007,『踊る身体のディスクール』, 春秋社：東京, 30.